

上り僅に舊改進黨を守れるは三浦碧水と彼あるのみなり然れ共三浦は既に實業に隠れ彼のみ獨り表面に立てり。

新聞界には新愛知名古屋扶桑の三社鼎立せるも勢力の優勢なるは新愛知を推す此他別に二新聞あるも微々として言ふに足らず。

其一一 (京都)

京都の代表的人物は濱岡光哲雨森菊太郎中安信三郎奥繁三郎等なり濱岡の全盛時代には京都澁澤と呼ばれ實業界の重鎮たり。其花柳界に於ける常に濱岡男爵又は御前と尊稱せられ彼の溫和瀟洒の風丰は亦其程の値ありき。然るに彼の經營に係る關西貿易會社は明治三十二三年頃に破綻して京都財界を撼し其より一敗地に塗れて第二の松本重太郎となれり。松本は埋木のまゝ遂に冢中に葬られしも彼は

屏息十年の後再び起つて代議士となり猶財界に關聯するも亦往年の倅をだに留めず。彼は初期議會に有名なる三十人組裏切の一名にて穢くも山縣派に降伏せるものなり時の參謀長は三崎龜之助にて今日の出新聞の前身たる中外電報の社長は濱岡にて三崎は其主筆なりし關係より遂に道伴れとなれるなり。

雨森菊太郎は儒者雨森芳洲の後とも思はる濱岡と深交あり中外電報時代より新聞に關係し現に日の出の主筆たり。明治三十年頃一度代議士たり極めて質實保守的なり今は實業界に没頭し多少の富を守りて餘生を送るに過ぎず壯時は疴癖強かりしも老と共に圓熟し來り、復た活社會に角逐の意氣なし。中安信太郎は元進歩黨に屬し神鞭知常の乾兒にして支部幹事たりき。京都に於ける凡ての名譽職を有し濱岡を中心とせる茶話會に拮抗して同志會を起せり。小策士にて選

舉掛引に巧なり。今は同志會に入り、官僚風を吹かして、舊の敵と抱合せり。彼には何等の主張も操守もなく、利のある處に轉輾し行くのみ。三十二年頃、京都日々新聞を起し、本願寺を利用し、一時豫戒令を食ひて没落せしが、次で西陣織元を取込みて代議士となり、稍名譽を恢復せり、彼れ下駄屋の俵にて人格劣悪のため、下駄安の稱あり。奥繁三郎は一種の怪物にて、人格劣等には相違なきも、その手腕力量は、負に水平線を出づ。淀の男にて、師範學校を出で、刻苦して辯護士となれる程の素養あれば、其識見も知る可きのみ、然れども彼は何處かに大なるものあり、殊に道德觀念に缺乏せるため、手段を擇ばずして、無遠慮に事を行ひ、會社荒しは勿論、相場にも一指を染め、常に惡戰に次ぐに、惡戰を以てし、黨費の献納を怠らざると共に、自家の財囊を肥し、遂に今日の位置を贏ち得たるは、全く其努力の結果にして、蓋京都の壓巻と謂ふべし。

其三 (大阪)

大阪は古來實業の都にして、通商貿易の熾なる海内匹敵を見ず、隨つて其風俗、氣習、人格皆前垂的にして、未だ曾て此地より天下を爭ふ程のものを出さず、現に政界に於ける阪人の勢力は、有や無しやの姿にて、彼等は亦た政權の得失を、毫も眼中に留めざるもの、如し。而して此黃金萬能界を支配せるものは、鴻の池、住友、藤田の三大頭にして、他は之を圍繞せる遊星に過ぎず。今其遊星中の主なるものを擧ぐれば、鈴木馬左也、中橋徳五郎、土居通夫、岩下清周、小山健三、片岡兄弟、島村久、山岡專太郎、森山又藏、菊池侃二、日野國明、板野友造、中井隼太の徒あり、新聞界に村山龍平、本山彦一、加藤恒忠、吉弘茂義あり。各方面に出頭没頭するも、皆財力の把握に營々たり、其間に立ち獨り偉觀を呈せるは、新聞界の勢力

なり。

財界の元老土居通夫は、松本没後の松本として推重さる。判官出身にて極めて圓滿なる好々爺たり、道樂は素人義太夫位にして何等批難の點を認めず、中橋徳五郎は大阪財界に天降りの自稱豪傑にして田中市兵衛の女婿たり、其援引にて管船局長を休めて大阪商船會社長となる。讀書癖あり。月々丸善より取寄する新刊もの、代價千金に上ると云ふ人に會するや、必ず豪語壯言し、對手を煙に捲かすんば休まず蓋彼の如きは小乗に捉はれ物に拘はり腐儒の寢言に腦味噌を攪亂され、何時迄經つても萬象の上に超脱する克はざるは、其豪傑がる所以にして何處となく後藤新平の或點に一致するが如きものあり。

岩下清周は財界の惑星、善く云へば機略縱横、悪くいへば譎詐極まりなし。其結果赤裸一貫より仕上げて北濱を關西一方の重鎮たらし

も、一たび策戦を過るや、檻樓百出して散々の窮境に陥り、忽ち尻に帆かけて遁げ出す迄になれり、小山健三は元文部次官たり、人格もよく頭腦も明晰なり。三十四銀行の隆昌今日の如くなるは、一に彼が摯實なる努力に出づ。片岡直輝と直温、直輝兄弟は土佐出身だけに、詐謀術策を弄するに得意なり。兄の直輝は表面平凡を装ふも、陰險計り難きものあり、弟の直温は出晒張り屋にて徳望地を拂へり、彼に比すれば兄は寧人に好かるゝの質なり。直温は常に財政通を誇るも、开は悉く若槻禮次郎の受賣にて名ありて實なき誤魔化し野郎と謂ふの外なし。

鈴木馬左也は故川上謹一の眼鏡に叶ひて、住友の大黒柱に引上げらる。彼は内田康哉、林田龜太郎、一木喜徳郎、早川千吉郎等と同期の赤門出て、夙に實業界に没頭し、三井の早川と東西の好一對たり。何を感ずりしや、野狐禪三昧に入るも、由來禪と算盤とは縁遠きものにて、是が住友

の大番頭なりとは、少し頓珍漢の次第ならずや。

鳥村久は鴻の池の三番頭にて、彼の上に蘆田順次郎又其上に原田次郎あり。彼は井上侯の系統に屬し、曾て辨理公使たりしことあり。今や役人臭味を脱するも、實業家の型にあらず。然れ共久しく富豪の番頭たりし餘徳には、可なりの資産を作るに至れり。山岡專太郎は世間に聞えざるも、好人物にして池原鹿之助と相待つて藤田家の柱礎なり。侃二の數輩あるに過ぎず、日野は初め自由系にて中途より國民黨に入り菊池は政友系にして極めて濃厚圓滿なる丈に活氣に乏し。(今は中正會に入る)。然れ共這次尾崎の入閣に不満を抱き、龔日大隈首相招待の宴に臨み思切つたる質問を發し滿堂を驚かし、と云へる如き猶自由黨時代の面影を偲ばしむ、其人格は費六に得がたき上品なる處あり。

日野は五尺に足らざる小兵なるも、争氣滿々何物に對つても吶喊を休めず、大阪國民軍中の錚々たり若手に板野及び中井あり、共に市會議員として侃々諤々たり、將來の代議士を期するも、大阪の如き地にて俄に此方面に勢力を植ゆるは頗ぶる困難なれば、今より更らに自強鞭撻を要す。

其四 (神戸)

神戸の財界は川崎と小寺に分割さる、而して兩者の富を作れる各其趣を異にす。川崎は一半政權と結び一半事業の上より利を産み以て今日の大を成す。小寺の先代は高利貸として有名なる泰治郎にして、彼は附近の細民を苦しめ彼等の骨を舐り肉を削りて蓄積せり。故に細民の怨府となり、彼の家にあるや常に鐵柵を室外に繞らし以て他

の襲撃を避けしと云ふ程なり川崎の當主芳太郎は庄藏の駙馬にして
 濃厚眞摯の人物之に反して小寺謙吉は父に類して惡錢を守るに忠實
 にして金力の凡ゆる者を支配すてふ迷想到捉はる。而して那の政黨
 に入るも大に持てるものと己惚るゝも財を散せずして持てるの理な
 し。先是彼の國民黨を脱して同志會に走れる亦た大に持てる筈なり
 しに市民より散々の目に遭はされ且つ同志會にても一向に持てざる
 は彼の膏盲に入りし迷想の祟りなり。彼の如き猶太男の一方に珍し
 き俠骨を帯べる女傑あり并は旅館一力の女將にて野添宗三を子の如
 くにして思ひ彼の松方幸次郎を敵として鹿を争ふや女將は手辨當草鞋が
 けにて狂奔せる程なり又故櫻井一久を非常に崇拜し今猶客に對へば
 談必す故人に及ぶ而して頃者犬養木堂に傾倒し随つて國民系の代議
 士を優待す曾て藏原森田の徒は屢々此處に宿して藝者買の費用迄負

擔せしめながら一朝同志會に走るや女將は彼等を人間にあらすとし、
 女中迄も均しく之を痛罵至らざるなし市井の一婦人猶節義の何たる
 を知る唾棄すべき彼等の猶社會に生命を保てるは亦た情なき世の中
 とや云はまし。

後藤勝藏は回漕問屋と旅館兼業の男なりしが往年後藤新平の臺灣
 にありし頃往復の都度此に宿れるより昵近の間柄となり遂に新平に
 依つて臺灣に巨利を博し次で新平の鐵道院總裁たるに及び汽車中の
 料理請負にて復亦た懐を肥せり彼は相場界にも出沒し常に新平と
 關聯してその財源となる固より無學強慾の一醜爺に過ぎず。鈴木は
 後藤系の巨商にして砂糖を以て成功し後藤の命なれば萬金立所に辨
 ずるものなり。川崎造船所長の松方幸次郎は二十幾名の兄弟中にて
 最も世故に通じ霸氣あるもの再度代議士たるも此方にては陣笠級た

るを免れず然れ共彼の關西財界に重をなせるは主として父正義の餘光たるを知らざる可からず。

新聞としては神戸又新最も古く神戸新聞之に次ぐ又新は渡邊尙の經營する所にして社長其編輯權を有し社説の如きは一々之を檢閲して是非を決す。尙既に没し其子之を繼ぐも父に及ばざる遠く屢々主筆と衝突す保守主義にて政黨政派に關係なく純然たる營業本位なり神戸新聞は川崎家の機關にて全紙川崎萬能を以て充たされ何等奇警雋烈の點なし。

其五 (岡山)

岡山は國民黨全盛の地にて犬養木堂の聲望其凡てを壓せること猶曾て佐々克堂の熊本を風靡せし當年の如き感あり然れ共木堂は常に

中央にあるを以て其目代として彼に代り采配を執れるものに犬飼源太郎あり彼れ元犬養の書生たり皮肉タツブリにして辛辣なる點は克く親分の木堂に似。彼の聲掛りなれば何物に對つても無造佐に突破し得るもの、一は背後に木堂あるが爲ならむ。彼に珍談あり往時他の五六の書生と共に木堂の玄關八疊の書生部屋に轉がれる際なりき。木堂も甚だ貧にして債鬼の群集は勿論時としては二錢の郵便切手にも困れることあり然るに一日突然那處よりか鮭の味噌漬一樽を贈り來れることゝて、コノ窮措大連も久振りにその大盤振舞に會ひ各々舌鼓を打つて歡喜せり。流石の木堂も此光景を見て威に耐へず竊に微笑して曰く諸子他年成功せば先づ何をか望むと聲に應じて鮭の味噌漬を飽く迄食つて見たしと曰へるは源太郎にして一座哄笑せしことありしが木堂當年の窮狀は實に此の如きものありき。

毎選舉彼の意嚮により公認候補者となれば當選同様にして其勢力の絶大なるを知るに足る。本春守屋此助の偶混せつ返しをやるや彼れ急遽東上して此助に決答を促して曰く此際多言を要せず去と就と唯其一言を聴けば可なりと。是には饒舌無類の守此も喞の音も出す能はずして彼の前に降伏せり彼は實に岡山の小木堂たり彼に次で副將株に小橋藻三衛あり。今縣會議長として犬飼の後を襲へり。演説好にて多少の浮調子を免れざるも操守堅實にして好箇の闘士たり阪本金彌は帯江銅山に蹉躓以來意氣頗る鎮沈せしが近時復び出銅のため之を十七萬圓に賣飛ばし稍元氣つきしも到底中原に戦ふの勇を見ず彼の國民黨を脱するや少くとも十四五名位の道伴ある者と信せしにオンリーワンの彼のみに過ぎざりし程彼は何事にも自から買取り遂に人生五十年を棒に振らんとせる男なり。然れ共閨房の勢力

は中々猛烈にて其子女も本庶相合すれば二十餘名を算し四五名の愛妾年々交代に一兒を産すと云へば其餘命ある間に猶幾多の増加を見るべく優に一小幼稚園を設けて可なるべく肉棒を振ることも此處迄行けば大に語るに足る。

西村丹次郎は阪本系統にて木堂の地盤より出で、代議士たり。常に理義に由つて行動す。其木堂に従へるは理義の爲にして理義よく情を制するものなり。疝癰あり喧嘩ツボイ方なるも腹中蟠りなき好人物野間伍造は小才あり。始終中金儲に浮身を窶して狂奔せり。口も八丁手も八丁容易に鶉呑にしがたきも其老の至るを知らず何事をかなさんと欲する處に其生命を認む。福井三郎は衆議院の講釋師にて眠氣覺しとして面白し然れ共政治家としては粗製濫造極る者なり。

新聞に山陽新報、中國民報あり、前者は小松原英太郎、其實權を握る。小松原は山縣の乾兒にて、主筆其他常に其系中より來る。現主筆加藤房藏の桐花學會より來れる如き即ち是なり。反對新聞だけに時として犬養及其與黨を攻撃せんとするも、攻撃しては賣れざる爲に常に其鋒尖を包まざるを得ざる程に、國民系の地盤は鞏固なり。中國民報は阪本の有なりしも既に大原孫三郎に譲りて關係を絶てり。國民系にも同志系にもあらざる中立の位置にあるなり。

其六 (廣島)

花井卓三、橋本太吉、早速、整爾、有田温の四名は廣島組と稱して中正會に屬する一人一黨主義の團體なり。四人組の外なる金尾稜嚴は元本願寺の坊主にして、曾て島根縣知事たりし時に教科書事件に連座し、其

後困頓して妾を携へ、滿鮮地方に流浪し、賣春婦の涎に生命を繋ぎしと傳へらる。四十年中、信徒より推されて議員となる故に、其地盤は固より佛教信徒なるに、彼は何を感ずれるや、這回の西本願寺一件につき、法主排斥論者たり、之を聞いて、法主を神の如く崇拜せる信徒等は、大に彼を怒れるため、彼の宗教的地盤は俄然として崩壊し來れり。此に於て、加議會開會中、屢々築地本願寺に浮腰の國民黨員を會して、小細工をなし、熾に政國合同に反對し、遂に國民黨を脱して、進歩俱樂部を組織し、時機を見て同志會に投じ、以て選舉費用にありつき、郷地の善男善女より絞るべき寶錢に換へんとするが如き、何處迄も坊主式にて其陰險なることは均しく坊主上りの藏原より以上なり。

井上角五郎の政界に於ける經歷は久しからざるにあらず、尋常なりせば、遠の昔に大臣の一椅子位は、贏ち得しならむも、彼が鄙吝陋劣の天

稟は何物に對つても發揮せられ今尙陣笠扱ひさるゝは自業自得と云ふの外なし。荒川五郎は壯士上りにて好んで駄辯を弄するも始より終迄何を云へるやら要領を得るに苦しむ程の臆家たり。和田彦次郎の地盤より出で事大主義の官僚一天張にして、木ツ葉天狗級に屬す新聞に藝備日々と中國新聞あり前者は早速整爾の主宰する所にし、て政友反對を標榜し、後者は荒川五郎主筆として専ら穢多村風を吹かせつゝあり。

其七 (福岡)

福岡は大阪以西第一等の富を有し且地域廣大なるだけに人物の色彩あるものも尠からず然れ共其富は一に地下の炭田より築き上げられたるものにして石炭成金として優に海内を濶歩して遜色なきもの

あり。就中最も大を成せるは貝島太助と安川敬一郎にして、麻生太吉堀三太郎伊藤傳ネム中野徳次郎等は其富も力量も憂に兩者に劣れり。其太ッ腹にしち奇警なるは貝島を推し行り口の堅實にして秩序あるは安川を貴ぶ人も知る如く貝島は鶴嘴一本より敲き上げ巧に井上侯に媚び三井に通じ他力本願の一本槍にて成功し安川は士籍より出で夙に福澤翁に就き泰西の新知識を養ひ家兄の松本潜と共に刻苦精勵して其業を開拓し大に獨逸商館等の信頼する所となり遂に盤石の基礎を築けるものにて前者の徑路と大に其趣を異にせるだけ兩者の富の應用も亦異なれり。貝島は邸宅を壯にし美妾を蓄へ華族と婚を通じ或は虚名の博し得られんには惜氣なく寄附義捐等を敢てするも。安川は之に反して虚榮的の發作を排するの傾向あり彼が三百萬圓てふ空前の投資をなして明治専門學校を經營せる如きや。隈伯の

早稲田學園以上の美譽にして伯は政界に元老たるの勢力を以てし、猶且つ喜捨金を大方に仰がざれば其目的を遂行するを能はざるを、彼の獨力にて然りしは亦た大に誇るに足るにあらずや。此他彼の偉なるは親友平岡浩太郎が政界に大飛躍をなせる際、屢々彼の出馬と出資を説きしも、彼は冷然一笑に付して之を斥け、後平岡の没落し平岡の命と頼める明治炭坑の三井の抵當となれるを、彼れ之を引受けて經營し其舊債を支拂ひ平岡の遺族を露せし如きは、俠骨の最も芳しきものならずや。彼の此俠行を聞き政客浪人等の常に門を敲くあるも、彼は之を視ること雲煙の如し。(彼が量に鶴原定吉の補缺として福岡市より一致して議麻生太吉は現に貴族院議員たり、其富力に於て安川の壘を摩せんとするも、人と爲り鄙吝強慾にして常に郷黨の怨府となる。伊藤傳ネムは伯爵柳原義光の妹を迎へて宿の妻とせるを以て、大に世に擲擲せ

られ、或は歌舞伎座に演劇を見、其巧なるを賞するにオイシイを連發し、或は自家の東京着を着炭と稱して嘲笑の種を蒔く程の文盲漢なるも其人無邪氣にして正直なる所あり、而も鑛業に精通し、往々専門技師を驚嘆せしむる事あり、堀三太郎と中野徳次郎は傳ネムと伯仲の階級にあり多く語るに足らず。藏内次郎作は議會彌次り組の一人なるも着炭的にしてお粗末千萬なり。但彼の馬鹿扱ひされざるは金を貢ぐが爲なり。

政友會の立物に野田卯太郎あり、頗る幫間的に出來上り、八方美人式にして其愛嬌ある特種の大笑は、人を煙に捲くに最も妙なり。井上侯とは極めて親昵の間柄なるが、侯の強烈なる疔癢玉も彼の顔を見れば忽ち引込むと云程に彼の笑は効目あるなり、蓋政友會の調和劑として或は小松田たるを得む歟。永江純一は政友會幹事長として、最も眞面目

なり、然れ共意見も策もなく寧ろ實業本位として立つを本人の長所とせむ。野半介は頃者頗るグラククの態度あり何となれば大原義剛杉山茂丸の徒同志會の旗幟を擧げ其機關砲たる九日に據つて狙撃の患あるを以て斯くは不離不着の姿ありと云ふ。大内暢三は主義を以て一貫せんとする最も有爲なる年壯政治家にして曾て故近衛公に跟隨して外遊し、世界の氣勢に通じ識見もあり手腕もあり多望なる前途を有せり。

昨年来杉山の遊説のため福岡に於ける國民黨は其根底より覆されたるが如くに傳ふるも、這は杉山關係の一部に過ぎずして大原進藤の如きも、一種の情義上國民黨を脱せるものゝ如し。三輪作次郎の如きは玄洋系の猛者として、熾に中央に在つて勇戦せるを見る。新聞として福日と九日とあり、前者は政友會の機關にして其發行紙

数の巨額に上り、紙面の豊富なること地方新聞の隨一に居る。反對の後者は其發行紙數遙に之に劣る、社長は大原義剛にして、杉山茂丸出資の任に當る。

以上は名古屋以西の大觀にして、惜しむらくば地方人物にして餘り傑出のものなく、傑出せるものは概して中央にあり、先づ大帯一揮し廳て中央に入り、重ねて仔細に評論の歩を進むべし。(鷺城)

九 東北人物の總まくり

其一 (總論)

我國の人物分布は關西中國から九州方面の西部に偏して、關東東北に少い、特に東北に對しては、曾て「東北人間一山百文」といつた冷罵もあ

つた程で甚寂寥の感に堪へない。何故に然るかといふに、其原因自ら三つある様である。一つは我國の地勢上、文明は何時も西部から這入つて漸時、東部に及ぶのであるが、東北は北方に偏在するので、自然文明に後れる。文明に後れるれば、人々互に切磋して研磨する機会が尠いこととて、是が有力なる原因たるを疑はない。二つには東北諸藩は維新の際に其方針を誤つて大勢已に去つて復救ふべからざる幕府に黨して王師に抗するに至つた。其爲めに藩時代の人物は大概此亂の爲めに倒れて後進を誘掖するものが無くなり、又政府から兎角繼子扱にされる傾向を見るに至つたのは其爲めである。關西地方は維新の際に種々なる人物を出して夫れ々此革命の爲めに貢献する所があつたけれども、何時も文明に後るゝ傾向ある東北からは此爲めに働いた志士といふものは殆んど出して居らない。

人物の出る出ないは其土地の社會状態に據ること勿論であるが、更に忘るべからざる一原因は昔韓退之が

士の能く大名を享けて當世に現はるゝは先達の士天下の望を負ふ者之が前を爲すこと有らざるは莫し、士の能く休光を垂れて後世を照すは後進の士天下の望を負ふ者之が後を爲すこと有らざるは莫し、之が前を爲すもの莫ければ、美と雖も彰はれず、之が後を爲すもの莫ければ、盛なりと雖も傳はらず、是の二人の者は未だ始めより相須たすんばあらざるなり。

と論じて居る様に、後進を引立てる先輩が居なければ、什麼しても人物が出悪くなる。先輩があれば、假令直接に引立てずとも、後進少年に「己も一つ誰某の様に偉い人物にならう」と思ふ刺激を與へる丈でも、人物喚起には大なる効益であるが、維新の際に人物を出し得なかつた東北

には後進を誘掖すべき先輩が無い。是が東北に人物を出し得ない、一の原因である。之に反して關西の各地方では、大小藩共、夫れ相應に人物を出したので、後進子弟に刺戟を與へれば、誘掖もしたから、續々人物が輩出した。人物の分布が關西に厚くして、關東東北に薄い理由は斯る事情に基いて居る。

然るに議會開設後、人物共通の途開け始めてから、關東東北に漸く注意すべき人物を出して、將に現代を支配せんとするものを産するに至つた。先づ之を政治上から論ずれば、關東からは、一時我政界を双肩に擔ふの概があつた星亨を出し、福島からは河野廣中、青森からは菊地九郎、工藤行幹を出して居つた。更に最近に於ては、山形から平田東助、岩手からは政友會總裁の原敬を始め、齋藤實、後藤新平、宮城から高橋是清を出して居る勢である。明治三十年頃迄は、大臣は關西地方出身者

の獨占にして、東北からは曾て一人の大臣を出した例がなかつたに拘はらず、前山本内閣には東北から同時に三人の大臣を列したことは非常の變化といはねばならない。東北出身で一番先に大臣の椅子を得たのでは、原敬で故伊藤公が政友會を提げての第一次内閣を造つた時に彼は突然として一椅子を贏ち得たので、次いで平田東助が第一次桂内閣の内相に列し、齋藤と後藤とは共に始めて第二次桂内閣に列し、高橋是清は山本内閣の大藏大臣に任じたのである。

東北は以上の如く人物を出すこと甚だ稀なるに拘はらず、外交界に限り東北出身者の多いのは不思議である。尤も外交界も往年は薩長の獨占で殆んど他地方出身者は指を染めることも出来ない位であつたが、今は却つて外交界に東北閥を造らんとする有様となつたのも驚くべき現象である。今は隱退し居るが曾て日本銀行總裁であつた富

田鐵之助は外交官出身である。原敬も前には外務省に居たので外務次官から全權公使迄行つたことがある。日露講和の際講和使の一員に列した當時の駐米公使高平小五郎は岩手邊の出身で現駐伊大使林權助は會津駐米大使珍田捨巳は青森今度駐埃大使に新任した佐藤愛鷹も何處か東北の出身と聽いて居る。同時に三人の大使を出して居るとは盛んなりと謂つべしだ。

外交界のみでない、近來は一般役人間にも東北出身を見ることが多なつた。是は今迄役人を出して居なかつた反動と東北は文明に後れて居る結果として今尙官尊民卑の風甚しい爲めである。我國は歴史上から什麼しても官尊民卑の氣風が養成されたので、一般に亘つて居る幣害ではなけれども、特に東北に激しい。それだから東北は近頃可なり人物を出すに至つたに拘はらず未だ一人の目星しい實業家

を出して居らない。思ふに之は官尊民卑の東北氣質を直寫したものだらう。

其二 (宮城縣)

宮城縣は以前五十四萬石の大藩で有つた所であるが人物は甚だ拂底して居る。從來東京で此地方を代表して居たのは今は故人となつたが曾て遞信次官杯をして居つた鈴木大亮富田鐵之助現時の高橋是清といつた位のもので一流の人物は一人もない。又地方の政界を代表して居たのは十文字信介草薊親明佐藤清佐藤琢次高野猛矩といふ顔振れであつた、今は何れも故人となつたので現在は政友會の菅原傳と同志會の藤澤幾之輔とが代表する形になつて居る。從來仙臺は國民黨政友會の競争地であつたのであるが、昨年政變の際縣下の國民黨

を率ひて居つた藤澤が黨を擧げて桂の傘下に馳せたので、以前の國民黨の地盤は全部同志會に歸したので、此縣下では國民黨は全滅して。今は政友會對同志會の接戦地となつた。昨年政友會内閣成立の際、内相が政黨虐めに長じたとの名ある森正隆を新潟縣知事から宮城縣に轉じさしたのは。縣下の同志會を居らうとした方寸であつた事が分る。

藤澤は元自由黨で例の三島通庸が東北各縣に歴任して、テキハキとして新政治を行つて居つた頃、自由黨が各所に崛起して、三島の政治に反抗したが、彼も當時反抗して入獄した一人であつた、其後自由黨を脱して進歩黨に轉じ、同黨では常に第一流の位置を占めて居たので、或時は至院委員長に擧げられた事もある。併し其人物は風采の東夷式なる如く甚だ粗野で下劣で利益の爲めには何物をも犠牲にするを厭は

ない。往年進歩黨内に革新非革新の騒ぎの時、彼は犬養の非革新派に屬して居つたのだから、昨年でも國民黨に止まるべき筈であるが、彼は桂の甘言に釣られて、平然國民黨を捨てたのである。

宮城縣の同志會は、全く藤澤が指揮して居る様に見えるが、夫は表面で、彼の蔭に村松龜一郎が有ることを忘れてはならない。村松は代官人時代からの辯護士で、藤澤に附隨して跡から政治界に這入つたので、藤澤と同じ徑路を辿つて居る。藤澤は古いといふ丈がお株であるが、村松は藤澤に比ぶれば幾分か頭も新しく、相當に腕もあるので、藤澤に優ること數等であるが、宮城縣の同志會を知るに、藤澤村松以外に一層有力なる勢力あるを逸してはならない。夫は荒井泰治、プラス後藤の勢力が働いて居ることである。荒井は元サミユール商會の番頭であつて、臺灣の同支店に居る内、後藤に知られ、其手先となつて色々なボロ

イ仕事に有ついたので僅かの間に一廉の成金となり、今は宮城縣多額納税議員となつて貴族院に列する身分となつた。乃ち宮城縣の國民黨が根こそぎ同志會と早變りをしたのは、後藤の虚勢、荒井の金の勢力である。随つて藤澤や村松は同志會に居つても矢張り後藤系の人物といふべきである。

菅原は元星の乾兒で、引續き政友會に残つて居るので、今は一寸家老格の所迄漕ぎ附けて居る。彼は曾て政友會の山口熊野渡邊勘十郎日向輝武等と移民事業を營んで居たので、米國に行つて居つた事がある。故に政友會には今是等の連中を目して、米國組といつて居る所謂米國組の内にも、日向は變に氣が紛れ、山口振はず渡邊も此頃は甚だ逼迫して居るので、比較的に羽振りを利用して居るのは菅原一人といつて善い位である。然らば彼は秀れたる人物かといふに別に秀れた點はな

く寧ろ垢拔のせない人物であるが、漸次其位地を高めて行く所を見ると、人に知れない所に長所が潜んで居るものと見える。米國組は元松田系に屬して居つたが彼の死後は原系に移つて居る、特に菅原は郷土の關係から尤も原に近づいて居る相である。

宮城縣の代議士で藤澤や菅原等の様に名目は賣れて居ないが二人の注目すべき人物がある。遠藤良吉と澤來太郎が夫である。遠藤は非常の飲み黨で議場に出て酒の氣を切らしたことがない。酒氣を帯びては何時も照山等と拮抗してヤジるので「グツ良」と綽名された程であるが、人物は至つて眞面目で、操守も甚だ堅固である。其様いふ人物であるから、政治問題なり、黨の事なり、彼が斯様と信ずるとあると、彼は早速總裁に面會して直談判を始め、政友會内の風では、平議員が何か意見を述べやうとするには、大概幹事から總務へと行く習はしで

あるも彼はソナ事には頓着なく總裁に直接する。夫で彼は黨内では直訴組とも綽號されて居る。彼は一昨年中議場で齋藤宇一郎を擲つて懲罰された事がある。其爲に懲たか爾來大層靜かに意氣消沈の態である。併し彼は齋藤毆打に就てはコウ言つて氣焰を吐いて居る『己が齋藤を毆打つた爲めに懲罰されたが桂に降參する様な悪い人物だから擲つたのだ世間は己の先見の明に感服しても善からう』ズ
 プ六健在なれ。澤は輕々しく黨籍を動かす缺點はあるが人物は甚だ摯實で彼が二三年來貧亡の中から經費を繰合はして熱心に財政の調査を行つて居るのは眞に感すべきである。若し三百八十人の議員中其一割でも善いから彼程熱心に政務研究に従事する議員があつたら我議院政治も大に面目を改める事だらうと思ふ。今や彼の調査は大に進んだらしいから其結果は遠からず發表されて我政界に多大の貢獻を爲す事があるかも知れない。

其三 (福島縣)

福島縣は高知縣と併せて我國に於ける自由民權思想の發祥地であつて我憲政史上に重位を占めた土地である。明治十四五年頃三島通庸が縣令として縣下に大工事を起した時河野廣中田母野秀顯花香恭次郎杯いふ連中が三島の縣治に反對する爲め崛起したのが縣下に自由黨の發生した濫觴である。當事福島には三師社石洋社無名館といふ三箇の團體があつて表面は別箇の團體であつたけれど何れも自由黨に屬する結社で箇々に土佐の同志社と拮抗する位のものであつた。河野が今日あるに至つたのは全く當時の福島事件に據るのであるが元來此事件は河野に依りて代表されて河野一人の事件かの觀ある

が畢竟此事件は前の田母野花香等が主動者で、夫に河野平島松尾愛澤寧堅杯が加はつて計畫したものである。然るに田母野花香は已に物故し、平島愛澤は落伍したので今尙政界に踏み止まつて居るのは獨り河野あるのみで、河野は此事件を代表する様になつたのである。河野は全く福島事件の河野として知られたのであるが、彼は決して此事件の首謀者でなく、其實田母野花香に勧誘されて加擔したに過ぎないのである。夫に首謀者と目さるゝに至つた理由は其尤もらしい風采態度の爲めに過ぎない。

元來河野は自ら計畫する男でなく、誰れか筋書を書く策士があつて一つの筋書を描いて呉れて之を色々吟味した上是なら一芝居演て相たと納得した時始めて舞臺に出て行く人物に過ぎない。彼の閱歷には、福島事件以外、日比谷事件と奉答文朗讀の二事件がある。此二事件も

福島事件同様自分で計畫したものでなく、皆黒頭巾に隠れて居る策士に操られて舞臺面に立つた迄に過ぎない。夫でありながら何場の事件でも主人の様になるのは前に言つた原因に過ぎない。河野元來中々の鈍根で、無暗に大事を取る方であるから、一つの計畫を飲み込ませる迄には中々容易でない。思ふに福島事件の當時其首謀者たる田母野花香は彼を説得する爲めに餘程骨を折つた事だらうと察せられる。河野の眞人物を叩けば實にコンナ風であるに拘はらず彼が依然として現在の地位を保つて居るのは何故かといふに第一其容貌の美なること、第二福島事件の首謀者といふ虚偽の歴史的な名聲があると、第三清貧に安んじて節操堅いといふ評判を得た爲めである。然るに彼の閱歷に就て調べると、福島事件は彼が計畫したものでないことは前に述べた通りであるが、金錢に關しては彼は甚だ汚い人物である。往年自

由黨に居た折り星と勢力争ひの結果黨を去る際に彼は脱黨料として樺山から若干をせしめながら更に進歩黨に入る爲めに同黨の坂本金彌に生活費を負担さす事にして、鋸式に行戻りの駄賃を取つて居る。昨年同志會に走つた時も恐らく同様の條件が成立した事と思はれる。彼は昨年同志會の懇親會席上我等が今日桂公と握手するに至つたのは全く地獄で佛に遇つたと同じだといつて嬉しがつて居つたが多分一萬圓位の臺所料が取れたので有難がつたものだらう。彼は操守が堅いと言はれて居るにも拘はらず兎に角領袖株で彼位黨籍を替へたものはなく此點に於ては陣笠連に藏原惟廓あると同じ事だらう。河野は自由黨から進歩黨に入り又新會に投じ國民黨に加はり同志會に奔つて居る。是では節操とか操守杯いふ事は認められまい。今は隠退して居るが曾ては衆議院に全院委員長や副議長を努めた

ことある阿部井磐根といふ老政治家のあることを忘れてはならない。彼は往年星亨が農商務省の金時計事件に關係して政界物議の種となつた時に議政壇上に星の罪惡を彈劾して彼を議場外に放逐した勇者である。全く政界を隠退しては居るが地方では今尙居然たる潛勢力を有して居る。阿部井の郷里附近から出て居る議員に鈴木萬次郎がある。彼は元一の藪醫者であるが前年議員在任中菓子税か何かの事に關して奔走して居る内に東京中の菓子屋を聯合して一の組合を造り之を土臺にして遂に一の保險會社を造つて今其保險會社の重役を遣つて居るのであるが藪醫者から叩き上げた位だから其人物が甚下劣で恐らく下劣の標本は一人で脊負つた様な人物である。前は國民黨に屬して居つたが昨年其本性を現はして同志會に馳せ參じて盛んに下劣風を同會内に吹かして居る様である。

十 言論壇の權威たる黒岩周六の價值

頃者新聞の論評は大に亂調子になつて來た。元來新聞は言論を以て唯一の城廓とするものであるから、當事者が其城廓を出でて實社會の活動に手を染むれば隨つて其天職を擲つ如くなる。例之ば海軍問題を捉ふれば獨り紙上の言論のみならず、出でて演說會もやれば又特殊の運動もやる、或は日比谷の騷擾事件に關聯して原内相に手詰の談判をなし、飽く迄謝罪の實を擧げしめんとせしが如き、皆是れ言論より一轉して實行に入れるものにして、宛として政黨家の其である。甚だしく記者としての立場を顛倒したものである。次で東京市會議員の選舉行はるゝや、非常盤會を標榜して熾に森久保一派を排撃し、選舉運動に狂奔の體であつた。然るに是等の運動は一の信念と主義の上に立

たず、常に或一派の政權に接近せんとするものゝ爲に利用されつゝあるので、單に其傀儡たるに過ぎないのだ。是等の現象は新聞てふもの天職上よりして、最も忌むべき憂ふべきフワクトではあるまいか。從來何時も中立不偏の地にあり、侃諤の筆を以て一世を風靡せる萬朝報が、一朝不幸にして如上の弊套に陥り、而も益々其度を強烈ならしめんとするは、惜むべき事ではあるまいか。現在の萬朝報は恰も砲兵が其砲壘を出でて、歩兵の散兵線に出でて白兵戰に参加する如なものだ。砲兵は砲を有して堅壘に據ればこそ、威力もあり効果もあるなれ、其が歩兵の眞似をした處で到底歩兵に及ぶ可くもあらず、遂には其砲壘をも危殆に陥いるゝの虞があるのみならず、記者の威嚴と品位を落し、其結果は世論を迷はし、國民をして適從する所を知らざらしむる如くなる。特に恐るべきは暴民政治を鼓吹し、又人を嚴格に批判する標的を

失する如くなるのである。

由來新聞の論調程的にならぬものはない、一昨年は島田三郎を完膚なき迄に攻撃し、昨年は忽ち筆を逆にして之を稱揚するが如き矛盾を敢てするのである。今日萬朝の如きは非政友を鼓吹し、熾に政友會を攻撃するも、政友會の全部が悉く腐敗せりと謂ふにあらず。又非政友會の面々が一々無疵なりと云ふにもあらず。夫の江間俊一は常盤派の首領株なりしも、彼が一旦常盤派を脱して中立を標榜するや、忽ち紙上に彼を謳歌するに至つては新聞としての主張の極めて薄弱なるを證するに足らずや、新聞に一貫せる主張なき程世間に侮蔑さるゝものなく、又記者の意氣地なきを裏書するものはないのである。

萬朝社長の黒岩周六が海軍問題以來、言論の城廓を出でて實行家となれるは、彼に取りて頗る不利益の事である、彼の社會に重をなせるは

一管の筆を提げて萬朝てふ堅壘に據り、何物にも捉はれず、最も正當に筆の威力を驅使せるが爲である。抑當初の萬朝は多少の非難を受けしにせよ、兎も角も新聞界の急先鋒として注目されしは、是非を明かにし、理義を正しくしたからである。然るに最近の彼は多年の苦辛を嘗て贏ち得たる榮譽を棄て、實行の渦中に投ぜるは、無稽の最も甚だしきものだ。假りに實行を可とするも、其には相當の同志を要するに、彼の道伴れとなれるは、新聞界の札つきたる松下軍治、大谷誠夫、石川安次郎の徒で、其機關たる國民や、まゝと、二六の如きは皆官僚系の機關として一種の批難を蒙れるもの計りである。黒岩は筆を執れば時論をも小説をも遠く彼等の上に出で、優に文壇の大家として濶歩しつゝあるも、實社會に入り、實行家たるには到底松下以下の徒輩と太刀打の出來得べきものでない、此點に於て深く彼の立場の變動を惜しむものである。

●黒岩の砲壘を出でて散兵線に立ち歩兵の真似をするに至れる逕路を究むるに三種の理由がある様だ。

(一) 從來彼の社會に重視されしは強きを挫き弱きを助け富を撃ち貧を救ふてふ一種の俠味を發揮したからである故に海軍問題の突發以來矢張り此筆法を以て突進した然るに之を繼續せんには困難の事情即ち經營上の困難を來たしたので忽ち不良勢力の捉ふる所となり理想に代ゆるに利益を以てしたのではあるまいか。

(二) 彼は物事に極めて凝性である一旦凝り出せば堂に上らざれば休まないのだ。故に哲學にも角力にも玉突にも五目にも其趣味の生ずると共に玄人の境に到らねば承知しない。趣味以外の事にも假之ば先年電車問題で東電と衝突し久しく法廷に是非を争へる如き其何處迄も初一念を徹さねば止まぬ即ち噛み付けば離さぬ

てふので、蝮の周六てふ渾名を博したのも此特質から出たのである。是は勿論其長所だが短所も之に伴つて來る即ち彼が政友會を惡んで飽く迄之を覆滅せんとする執念に、偶松下一派の惡玉に乗せられ遂に手段の如何を擇ばずして盲進しつゝあるのではあるまいか。

(三) 彼の意地強く執念深きだけ其己惚方も亦た頗る激しい。故に這回の運動に對しても必ず自ら云はむ我れ出馬せば慥に効力あらむ我れ政友會を攻撃せば決して惡事をなすに至らざるべし又非常盤派運動の如きも我ある以上必ず降伏せしむべしと。然るに彼は人及政界の實情に通せず言論の大家なるも實行の小兒である哲學論なり文藝に於ては其蘊奥に通じたらんも實社會の實體には極めて不案内である。假へば其紙上に時々發表さるゝフースヒーの如き毎時估窟贅牙の文選式の文字を臚列さるゝも毫も實狀に通せ

ざる閑文字だ而して彼の之を感賞せるが如き如何に其實社會に迂遠なるかを知るに足る。而して此迂遠に惡玉の乘するありて益々彼をして迂遠ならしむるのではあるまいか。

此に於てか隠れたる一の勢力たりし彼は俄然として現はれたる平凡漢となつたのである。若しも此儘にして推行かんに彼は猶從來の勢力を維持し得べきや、將た全然之を失墜すべきや、興味ある問題で鼎の輕重も略定まつた様なもの、言論界の權威たりし彼れ三省四省本來の立場に歸るのは、刻下の急務たるを忘れてはならぬ。

岡 八 山 人

十一 我が戦局舞臺面の人物

(一) 序 論

今次の歐洲戦亂が如何に進展し、日獨開戦も亦如何に變轉し、而して如何に終局すべきやは、今日輒く豫斷し能はずと雖も、各自列強が總て自國本位にして自國の利害の爲めに行動しつゝある以上、世界地圖の色彩を變化するの外國際上の將來に多大の影響を來すや、疑を容れず。されば戦争舞臺面の花形は軍人に相違なきも、戦局の大勢を支配するものは、軍人以外に政治家あり、外交家あり、財政家あり、實業家あり。是等の人々が縦令舞臺の正面を切らざる迄も、絶えず活動し、夫れ相應に手腕と力量とを發揮しつゝあるなり。戦時と云ひ、戦争と云へば必ず軍人の獨り舞臺なるが如くに世人は思ふも、是れ單に感情の聲にし、眞個の觀察に非ず。攻城野戦の雄を競ひ、制海權を把握するは勿論、猛將勇士の任務なりと雖も、其の功勞を空しくせざらしめんが爲に、戦時乃至戦後の外交に手腕を揮ひ、又商權の確立を期し、以て國威を宣揚

し開戦の美果を收むるは所謂フロックコートの人々の重責ならざる可からず。砲煙彈雨の下に活動する銃後の人素より悲壯痛快なりと雖も列強と卓上に折衝し或は牙籌を取りて勝を口舌と黄金との間に制するも亦大なる難事ならずとせず。是れ吾人の戦局舞臺面の人物を論ずるに方りて其の舞臺を開戦前及び開戦の二段に分ち併せて戦後の光景を暗示する所以なり。

然れども吾人は茲に『戦局』なる脚本を書き卸さんとする者にあらず。其の意は二段に分つにありと雖も特地に開戦前及び開戦の標題を設けず。唯其の心を以て論述し去るべきを以て讀者も亦其の心を以て此の舞臺面に對せられん事を望まざるを得ず。此の論固より戦局に限定さると雖も如何に戦時なればとて凡人が非凡人になる譯にも非ざれば吏才商魂が人豪になるべきに非ざるなり。戦局關係者の

悉く人豪ならざるが如く夫れ以外の人物にも亦人豪なきに非ずと雖も今其の論局を制限し興味を茲に集中せんとするなり。是れが爲めに戦局關係者——殊に軍人は代表的ならざる者をも擧げたれども之を以て吾人を戦争に媚ぶる者と做すは不可なり。吾人は其の戦時と否とに關せず其の人物の秤量に斟酌を加へず己れの好惡を以て褒貶せず斷乎とし是を是とし非を非とするものなり。將軍宰相必ずしも完き人に非ず。戦時の故を以て短所の長所と變化するものに非ず。戦局を背景とせるが故に愚者の化して智者となるものに非ず。吾人の所論或は軍國民の感情に逆ふを保せずと雖も而も一片の衷心は墨汁を欺く可からざるなり。

(二) 首相大隈と外相加藤

日獨開戦の已むなきに至れるは我が邦の宿志たる東洋永遠の平和を害すべき行動を獨逸の敢てせるに由ること勿論なりと雖も其の決意を促せるは日英同盟の關係よりして英國の誘ふ所となりたるが故ならずんば非ず。而して獨逸は最後の通牒を發する迄には諸種の交渉もあり制肘もあり活動聊か鈍りたるが如き事なきに非ずと雖も遂に蹶然起ちて歐洲戦亂の渦中に投ずるに至れり。此の間に在りて英國と折衝して事を運びたるは云ふ迄もなく首相大隈重信及び外相加藤高明なりとす。陸相岡市之助海相八代六郎藏相若槻禮次郎等も亦濃厚なる關係を有するも彼等二人者を以て張本人なりとせば是等三人者は参考人と謂ふの格なり。陸海二相の如きは當然挑發者たるべき地位にあるも今次は是等二相より強要せるの形跡は認む可からず。三年未解決の増師及び海軍擴張二問題を一氣に解決するには絶好機

なるも其の口實を得んが爲めのみにては大亂に参加する能はず。事苟も國家の前途に關する以上慎重なる考慮と確固たる覺悟となかる可からざる也。伯大隈及び男加藤等の始は處女の如く終は脱兎の如くなりし所以全く茲に存すと云ふ者あるも吾人は彼等の外交的手腕に對しては聊か遺憾なき能はざるなり。

伯大隈の言に俟たざるも開國進取の我が國是にして東洋永遠の平和の我が希望なるは夙に世人の知る所なり。而して今日の如き武裝的平和の時代にありては東洋永遠の平和を確保せんが爲めには太平洋上の覇權を我が邦の掌握するにあるも亦世人の知る所なり。日英同盟の眞精神は單に英國の爲めに印度の安全を保護せんとするのみならず太平洋上に於ける日本の利權を擁護するにあらば今次の戦亂に對しては英國は東洋に於ける我が活動を制肘するの謂はれなきな

り。我も亦同盟規約面に對等の權利を有し、國際的信義を重んじて攻守に任ずる以上、英國の徒らに自個の利益を侵さるゝが如く懸念し、理不盡にも制肘し來る所を甘受する事あるべからず。開戦前に於ける我が外交は巧妙なりとの讚辭を呈し能はざるも、擧國一致の聲に促されて國民は其の外交攻撃の手を緩うするに至れり。然るにも拘らず、伯大隈及び男加藤等が、開戦當時の退讓的態度を以て、戦局を收むるが如き事あらば、國民の反感を買ふなきを保せず。

男加藤は同志會總裁にして、多年外交官たりし經歷を有する外相なり。大隈内閣組織の際に於ける謀主たり、唯一の外相適任者たり。而して富豪三菱の女婿たりしが故に、輿論内閣の聲望を一身に負ひて起てるの概あり。尤も閣員の選任其他に就て同志會不平組の非難を蒙り、黨外に於ても亦兎角の批評なきに非ざりしも、方今第一流の外交家

たるは敵も味方も之を認めざるを得ざりき。其の聲望素より伯大隈の比に非ざるも、實際に内閣の中樞となり、實權者となり、其の運用の任に當るべきも亦世人の疑はざる所なりき。伯大隈は大風呂敷を展開するを得意とし、盛んに各種の理想を捻出し來るも、男加藤は大言壯語せず、實行に向つて慕進するものゝ如し、一は輿論を顧慮し、溫容を以て衆心を得んと努むるも、一は無愛想にして眼中人なく、自己の實力に信頼して萬事を決せんとするに似たり。伯大隈を以て立憲政治家の風格ありとせば、男加藤は專制政治家の面影なきに非ざるも、こは唯外面的觀察にして、其の内部的解剖を試みるに於ては、却て後者の英國風の政治家たるの特質を發見すべきなり。

男加藤は赤門に於て官僚的教育を受け、後英國に學び、外交官として亦同國に駐劄せし、久しければ、従つて其の感化を受けたりと見る

を得ん。最初三菱の商事會社に入りて故岩崎彌太郎に其の人物を知られ、英國より歸朝後公使館書記官兼外務省參事官となり、次で外相大隈の祕書官となりしが、二十三年二月非職となれり、同年九月大藏省參事官となり、銀行局長、監査局長、主税局長に累進せしが、二十七年七月特命全權公使となり、外務省政務局長を兼任し、爾後外交界に浮沈して今日に及べり。其の間短日月なるにもせよ、三たび外相となり、未だ大に手腕を發揮せずと雖も、手腕を有する者の如く思はしめたり。駐英公使としては、日英同盟の橋渡しをなしたるが故に、今次の戦亂に對して實行者となるも亦深き因縁あり。曾て伯大隈の下に外相祕書官となりし彼れが、今又外相となりて其の手腕を世界の檜舞臺に試みるも亦深き因縁の存する所なり。吾人は彼れが如是縁あるが故に、伯大隈とは同心一體の活動をなし、日英の意思が特別に疏通し、以て戦時乃至戦

後の外交界に活躍して、大なる功果を收め得べしと豫言する者に非ざるも、他の因縁なき者に比すれば、何程か便宜ありとすべし。加ふるに、彼れは數年間大藏省の要樞にありしを以て、財政に對しても亦盲目に非ず。縱令時代附となれるにもせよ、頭腦明晰にして算數に暗からざる彼れは、藏相若槻の財政計畫を色讀するの眼光を有すべければ、戦時財政と武斷外交の調和を見出すに於て、其の利便や尠少に非ざるを信せんとす。

然れども、男加藤の外交政策は、常に消極主義なり。今次の開戦を以て、彼れを武斷外交の人となすは、妥當に非ず。彼れの平生よりすれば、國際間の紛議は直ちに背後の兵力を以て脅威せず、可成的平和に解決せんとするに似たり。是に於て一たび難關に際會すれば、之を「時」に委ぬるの傾向あるが故に、無解決を以て解決の要たるものと做すこ

となきに非ず。夫の排日問題に於ける前外相牧野伸顯の失敗と屈讓とを排し飽く迄も其の根本に就て争ひ自國の面目を傷けざる程度に於て解決せんとするが如き彼れが政策の一端を見るべきに非ずや。彼れは短兵急に肉迫せざるも曠日彌久の策を講ず。機會を捕ふるに敏ならざるの失あるも豫め一條の通路を用意して進むが故に敵の陥穽に全滅の醜態を演ずる事なし。斯の思慮周密なる遣口は晴天霹靂を飛ばすの快なきも梅雨晴に微光を認めたる程の明味は感せざるに非ず。所謂天才の外交に非ずして常識の外交なり。常識の外交は、平時にありては善く其の能力を發揮し得んも戦時に際して殺活擒縱の妙用を擅にすること能はず。往々後手を引き爲めに機會を逸する事なきに非ざるなり。戦時に於ける對支外交の如き對米外交の如き對同盟國外交の如き男加藤の緊揮を要すべき問題一にして足らず。

常識外交の遂に無能外交に墮するなくば可なり。

(三) 五大使二公使

今日の外交は、多く訓令外交なるが故に、在外の大公使は、時の外相の訓令傳達の器械たるの觀あり。されば外交失敗の責任は、大公使の夫れよりも時の外相にあるなり。男加藤の外交政策以上の如くなれば、それが器械たる可き大公使も亦其の外交傳達を以て能事となすや必せり。さは云へ、大公使も亦親任官乃至高等官なる以上唯一個の器械を以て満足せず。訓令を活用する位の手段は取る可き筈なり。元來無能にして器械の境遇に甘んずる者は扱て置き、苟も帝國の外交官を以て任ずる者は、訓令以外に機宜の處置を採り、或は事端を未然に察し、本省を刺戟する位の藝當は演ず可きなり。此の藝當を演じ得る者は、

駐露大使本野一郎の如き、駐伊大使林權助の如き、駐瑞公使佐藤愛麿の如きを數へ得るに過ぎず。駐米大使珍田捨巳の事務的才幹ある駐英大使井上勝之助の交際界の花形たる駐佛大使石井菊次郎の外國語に巧みなる駐支公使日置益の未知數なる何れも、戰時外交上に活動すべき人物なるも、器械以上の馬力を發揮して、善く訓令を活用し得るや否や、疑なき能はず。

男本野は、故讀賣新聞社長本野盛亨の作なり。少時佛國に學び、里昂法科大學を卒へて、法律博士の學位を所有せり。後年我が法學博士となれるを見て、彼れの國際法に通曉せるや明かなり。其の學殖或は講義專賣の徒に劣るやも知れずと雖も、其の實際に活用するに於て、彼等の比肩を許さず。人と爲り、温厚宛然君子の風あるも、辭令に巧みにして、且多少の機略を藏す。多年外交界に在るを以て、歐米の大勢に通

じ列國の均勢に就ても一家の見を有し、歐洲戰亂以前既に其の觀察を本省に致したり。彼れ久しく佛國に駐劄せしが、日露戰後露都に轉任せるは、同國の感情を融和し、戰後國交の圓滿を期せんとするにありしなり。併し敵愾心を有せる露國の上下は容易に我に親近せず、動もすれば滿蒙境上に於て日露の反撥を誘起せんとせること一再ならず。温厚彼れの如く、外交の辭令に巧みなる彼れの如きを以てするも、露國を籠蓋せんこと容易ならざりしが、外交界の『時』は彼れの手腕以上に漸次舊來の惡感情を去らしめ、利害の關係よりして遂に日露協商を見るに至れり。端なく今次の戰亂に於て、利害の一致上より始めて熱き握手を交換し、當初の目的に副ふを得たり。近年健康を害して、退隱を仄めかしたつゝありし彼れには、天與の僥倖とも稱す可きなり。機會は時に手腕を倍加する事あり、男本野の如きは全く此の機會線上に群

を抜ける者ならずんば非ず。

佐藤は駐埃大使なりしも、國交斷絶後其の兼任地なる瑞典に赴き、專任公使となれり。彼れは人物奇峭なるも、手腕の見るべきものあり。夙に大使たるべかりし人物なるも、在來の外務省は何故か佐藤を永久大使たらしめずとの不文律を制定し、彼れの手腕を制肘し、其の陸進を阻止し來れり。然るに男加藤の外相たるに及びて、此の不文律を棄却し、駐埃大使に擧用されしも、再び公使となりて、形勢を觀望せざる可からざるに至りしは、不運の男と謂はざるを得ず。井上は公伊藤、博邦の實兄にして、侯井上馨の養嗣なり。明治十五年日本銀行支配役より身を起して、大藏省權少書記官となり、次で外務省權少書記官を兼任し、二十年二月外務書記官となりて、獨國に在勤するに至り、專任の外交官とはなれるなり、二十九年五月辨理公使となり、三十一年二月特命全權公

使に進み、三十九年一月遂に大使となり、其の陸進さながら順風に帆を張るに似たるものあり。夫人の交際界の明星として燦然たるを見るの外、未だ曾て彼れに非凡の手腕あるを聞かず。吾人は月並に養父の庇蔭なりと推斷するを好まざるも、事實は如何ともする能はざるなり。唯人物重厚にして、片々たる輕薄才子ならざるを多とするのみ。近時侯井上が駐支公使の選任其人を得ざるに憤激する所あり。伯大隈の膝詰談判の爲めに、興津の別墅を出で、急遽上京せるを耳にす、疇穢強き老侯のさもある可き事なれど、唯其の一方のみを觀て、他方を顧みず、駐英大使勝之助に對して寛大なるが如きは、矛盾の所業と謂はざるを得ず。對支外交の振作を期する以前、先づ對英外交の刷新を圖り、活潑々地の活動を試みるを要せずや。

男珍田は佐藤と同じく弘前の人、明治十九年三月外務局となり、公使

館書記官領事總領事等と歴任し三十年五月辨理公使に進み一人前の外交官となれるも未だ頭角を抽んづるに至らず。伯刺西爾和蘭等に悠遊せしが三十三年六月特命全權公使に陞任して露國に駐劄し三十四年十一月外務次官となり日露戰役の外交事務に執掌するに至りて茲に始めて外務省に其人あるを知られたり四十四年六月大使となりて獨逸に駐劄し次で米國に轉じたるなり。外交事務に鍊達せる點に於ては男石井と併稱さるゝも其の人物何程か石井より大なる所あり、外交的手腕も亦石井の優柔なるに比し多少の凄味あり。對米外交の失敗は蔽ふべからざるに前外相と現外相との何れにも聽從して例の訓令外交に專一なるを見れば次官時代に贏ち得たる名聲の漸く下り坂なるの觀なからず。男林男石井日置の三人者は皆帝大の出身なり。林は會津の出身だけに氣骨あり。時に外相の意に逆ふ事あるを以て、

外交官中の變物視さる。朝鮮支那の間に於て首を擡げ將來大に伸ぶ可く期待されたるに似ず未だ外交界の記録を破る程の手腕を示さず碌々たる芋塊の徒と同一籠中にあり。本野珍田等と共に外相に擬せられたる事なきに非ざるも新聞紙上の豫告のみに終れり。彼れの適任地は寧ろ太利に非ず寧ろ現今支那の如きにあるも諸種の事情に依りて其の轉任を見ず無能公使日置の徒を智利より起用するに至れり。日置益の語呂辟易に通ひて妙ならざれば保守退嬰を事とするに至るなきを保せず。赴任後攻戰地帯に關する交渉の如き吳淞問題の抗議の如き無難に進行せしも斯の如きは局部的小問題に過ぎず。今後支那政府の暗中飛躍や獨逸の陰險なる畫策や米國の火事場外交や一日も油斷すべからざるものあり。對支外交の大局よりする時は我が方針の確立せず或は同盟國に掀翻せらるゝが如き杞憂なきに非ざるを

以て局部的解決を以て満足すべからず。日置の徒らに外相の訓令を死守し英公使の意を迎ふるにのみ急なるに於ては、對支外交の活動は到底望むこと能はざるなり。既に兵力を山東省の一角に動かしたる以上、此の機會を失する事なく、支那政府の覺醒を促し、東洋永遠の平和を確保すべく、自主的外交を試みるに於て遺算なきを期すべきなり。

(四) 伯大隈と原敬

伯大隈は曾て外交の任に當り、中頃民間の外交家を以て任じ、現下首相兼内相たるも、帝國の外交に對しては重大の責任あり。方今我が邦に於て世界的人物を求むれば、何人も指を彼れに屈し、次に元帥東郷平八郎を擧ぐるの常なり。東郷は日本海々戰の英雄として世界に記憶せらるれども、大隈は一政治家、一外交家として、非ず實に日本の名物

男として、大人物として世界の視目に映じつゝあるなり。爵位勳等を以てすれば、伯大隈の上に公侯あり、大勳位ありと雖も、そは大人物の表徴に非ず。故伊藤博文の如く公爵大勳位にして、而も大政治家たる名實併せ得たる者なきに非ずと雖も、斯の如きは明治年間彼れ一人のみ。公伊藤の生前非難必りしが如く、伯大隈の爲す所も亦攻撃を免れざれど、苟も完き人に非ざる以上は、如何に傑出せる人物なりとも、他の非難と攻撃とより脱出する事能はざるなり。吾人は伯大隈の主義政策の總てを謳歌するものに非ざるも、彼れの現政治家中に群を抜き、世界の見て以て大人物となす所以を認むるに吝ならざるなり。

伯大隈は明治維新の際、年少なるにも拘らず、佐賀藩の代表者として新政に干與せり。人と爲り、雋敏にして膽略あり。機智空湧、手空勁練、加ふるに雄辯の他を魅するものありしが、故に儕輩に重きをなせり。

殊に兵庫談判の際、英公使パークスと舌戦を試み、我が面目を全うするを得るに至りて、外交的手腕の凡ならざるを稱されたり。明治二十一年二月二十九日、九月三十一日、六月の三度外相となりたるも、何れも短日月に過ぎず。最初は侯井上が條約改正失敗の後を承け、如何にもして之を遂行せんとせしが、内地雜居の事より守舊派の反感を買ひ、陰謀者の爆裂弾に觸れて、隻脚を失ふに至れり。隻脚伯の稱是れより起りたるも、爾後彼れは非常の健康體となり、心力旺盛の人物となれり。伯大隈は今日こそ多少の崇拜者を有すれ、當時にありては、民論の反對のみならず、薩長兩派の排斥する所となり、内外多くの敵を有せり。而も剛情我慢の彼れは、薩長の勢力に屈せず、政黨に立脚して、新生面を開拓し、進歩的思想を鼓吹せるは、世人の記憶に新なる所なり。一たび隈板内閣を組織し、首相の印綬を帯べるも、幾許ならずして、伯板垣と感情疎隔

し、遂に土崩瓦解するに至れり。是れより自由黨の政客は大隈に含む所あり、其の一言一行の微と雖も非難し、政界より葬らざんば止まざるの擬勢を示せり。今日の政友會が彼れを攻撃し、何とかして失脚せしめんと謀るは、其の因する所遠しと謂はざる可からず。國民黨の前身たる憲政本黨の内訌以來、伯大隈は黨首の地位を去り、専ら育英の事業に従事し、早稻田の邸を開放して、内外の客を吸收せしが、故に、名望漸く一世に高く、薩長の官敵も、民間の政敵も共に憎まざるに至りしなり。其の然る所以は、急に伯大隈の偉大を認めたるが故に、非ずして、再び政界に起つ能はずと傲したるに由るなり。然るに今春彼れが衆望に推されて、所謂輿論内閣を組織し、同志會と長派との援護に依りて、政權を把握するや、薩派と苟合し來れる政友會は、是非を判別せずして、事毎に衝突を試みるに至れり。殊に今次の戦亂に参加し、内閣の壽命長かる

べきを觀るや、遮二無二之を倒壊し去らんとしたりき。如何に戦後の論功行賞に於て、伯大隈の侯爵となり、男加藤の子爵となり、尾崎武富等の男爵たるべきが癩に障ればとて、舉國一致の聲を聴くの時強ひて毒矢を擬し、政争の爲に愛國心を冷却せしむるが如きは、吾人の採らざる所なり。

軍國議會に於て首相大隈が、某代議士の質問に答へて、『決して舉國一致を強ふるものに非ず、同意ならば一致して同意せよ、反対ならば何時にても反対せよ。是れ國家に對する自己の意見なればなり』と謂へるは、政友會の峰起して騒わぎ立つる程の問題に非ず。某代議士が『舉國一致を強ふる』云々と擲擲せるに對して、斯の如く答辯するは、言論を尊重する伯大隈としては當然を謂へるに過ぎず。議會に對して、舉國一致を哀訴するが如きは、堂々たる政治家の舉措に非ず。吾人

は某代議士の質問に興味を感ずるも、他の小策士が些細なる言葉尻を捉へて詰責し、失言となす所の心事を疑ふ者なり。政友會總裁原敬は其の議員總會席上に於て、『國際上の事は、朝令暮改する能はず、故に將來を考ふれば、我々は國家に對して憂慮に堪へざる點ありと雖も、其の事情理由を明言するは、愛國の至情之を許さざるなり』と、奇怪なる言を弄せり。既に國家の將來に對して憂慮する以上、侃々諤々の論議を闘はずは、是れ愛國の至情に非ずや。然るに議會に於て其の至情を披瀝せず、堂々たる反對論を主張せず、陰險なる政略を弄するが如きは、決して憂國の士の爲さざる所なり。伯大隈は常に輿論を尊重し、男加藤は國民的外交を唱道し、日米交渉の顛末を公表せる程の雅量あり。然るに今次俄かに秘密の鐵扉を設け、日英交渉の經過を公にせず、日獨國交斷絶の結論のみを示すは、依然として舊式の秘密外交なり。國民

的外交の誠意何處にある。吾人は此の點に就て伯大隈の反省を促さんとする者なり。

(五) 藏相及實業家

藏相若槻は帝大の出收税吏より進みて今日の地位に陞れる人なり。戦時乃至戦後の財政に就て経験あり苛斂誅求等の手心をも知悉し居るを以て今時の戦時又は戦後に處してびくともせざる可きは天下の認むる所なり。彼れは四十七歳にして始めて藏相となりしが其の間大藏省の總ての椅子を経廻り來りしと云ふも不可なく稅務署長となり局長となり次官となり苛斂誅求術と財政とに精通する點に於て政界獨歩の觀あり。人物冷靜にして頭腦明晰財政計畫に就ても亦一家の見を有す。始めて其の才幹と手腕とを認識されしは彼れが兼攝藏

相桂太郎の下に次官たりし時なり。當時公桂は財政の大綱を執るに止まり其他の細目に至りては悉く之を若槻の手に委して顧みざりしも省内の事務整然として一絲亂れず成績大に見るべきものありき。是れ彼れが細心にして而も放膽なる執務振の能く下僚を推服せる所以ならずんば非ず。

●桂内閣の藏相としては在任幾許ならず何等見るべきものなかりしも再び現閣の藏相となるや前藏相高橋是清の積極的借金政策を排して非募債主義の根本的財政刷新策を採るべきを表明せり。是れ伯大隈の財政意見を加味せるに相違なきも亦彼れが從來の經驗に鑑みる所ありしなり。其の財政策に對しては多少の非難なきに非ざりしも財政の根本を確立するには之を措いて他に策なしとは識者の一致せし所なり。然るに他方に於ては廢減稅の止むなきあり又軍備の充實

を要するあり如何にして此の難關を排し、多數の期待に背かざらんとするかは多大の興味を以て注視する所なりしに、今次の戦亂は廢滅税を一時見合はするに至るなきを保す可からず。唯吾人の望む所は、口實を戦亂に設けて突飛なる軍備擴張を敢てし、更に苛斂誅求の態度に出でざらんこと、是れなり。從來の戦役にありては、實業家は常に大に儲けんとするのみにて、戦局の大勢に就ては、何等考慮を施す所なかりしが、近時漸く覺醒して、細心の注目を拂ふに至れり。されば如何に苛辣なる手腕を有する若槻と雖も、彼等を度外視して苛斂誅求を策する事能はざる可きなり。

實業家中、今次の戦亂に對して奮起せるもの男澁澤榮一あり、中野武營あり、男近藤廉平あり。男澁澤は第一銀行頭取に過ぎざるも、其の經歷より觀る時は我が財界の元老なり。先年隱退を聲明せしも、それは單

に一時にして、現下多くの肩書をこそ帯ばざれば活動は寧ろ在來以上に意味あり。在來は内地の銀行會社等に有名無實の關係を結び、時に財界の肝煎となり、時に居中調停役を勤むるに過ぎざりしが、近時漸く眼を支那大陸に注ぎ、或は中日實業會社を發起し、或は支那視察をなす等眞個意味ある活動をなせるを觀る。伯大隈の七十餘歳にして政界に復活せると、男澁澤の老來近隣に注目せるとは、一種の對照を感せずんば非ざるなり。

中野は東京商業會議所の會頭なり。男澁澤の後を襲ひて此の椅子を占めたるが、肝煎好きにして調和性を有するの點、好個の會頭なりと稱さる。彼れは高松縣史生より身を起して、内務農商務等の書記官となり、挂冠後東京株式取引所肝煎を勤め、次で關西鐵道社長となりしが、再び取引所の副頭取に擧げられ、新法實施と共に理事長となり、前後二

十年間専心盡瘁せり。其の間取引所限月短縮問題を解決せるが如き、
 日露戦役前後に二回増資を断行せるが如き、其の功績鮮少に非ず。商
 業會議所會頭となるに及びて、財界の紛擾に對する平和的解決者を以
 て任じ、根氣よく諸方面に活動するが故に、漸く財界に信用と勢力とを
 倍加し來れるを見る。彼は曾て香川縣會議長となり、代議士たるの經
 歴あり、政界に野心なきに非ざるも、利害の打算上より理事長となり、馬
 鐵經營者となりて富力の培養を圖り、敢て深入りを爲さざる所に、彼れ
 の實業家氣質を見るなり。然れども、彼れは男澁澤の如く銀行業と終
 始し、藏相の推薦を固辭する程の境地に達せず、苟くも事情の許すに於
 ては飛躍を試みんとするの野心なきに非ず、近事東京市政界に乘出し、
 市會議長の椅子に凭れるに觀るも、實業界に没頭するに甘んせざるを
 知るべきなり。彼れは近く支那に遊びて殖産工業の實情を視察し、大

に本邦物産の輸出と商品の改良に資する所あらんとすと聞く。吾人
 は彼れの政治に興味を有する故に、此の行の單に實業上の視察に止ま
 らず、より以上の意味を以て支那に向はん事を望まざるを得ず。實業
 家の實業の爲めの實業家に墮せず、時に平和の外交家となりて、國際關
 係の融和を圖り、利益の打算以外更に國家に貢獻せん事を期せざる可
 からず。

男近藤●は三菱系の實業家なり。伯大隈●や男加藤●や、藏相若槻●や、現内
 閣の爲政治家の三菱に親近なるが多ければ、男近藤の如きも亦此の際大
 に活動せんとするなるべし。彼れは三菱の大番頭たる豊川●良●平●の妹
 婿にして日本郵船會社と二十五六年間の關係を有する人なり。少時
 漢籍を修め、變則に英語を學びたりと云ふの外、他に何等の教養なきも、
 今日までの經驗が能く今日の地位を築き上げたるなり。彼れを海運

界の人物に比するに東洋汽船の淺野總一郎の如く創意の人に非ず大阪商船の中橋徳五郎の如く手腕の人に非ず何等新彩の見るべきものなく平凡なる實務家に過ぎずと雖も政府保護の下に發達せる事業なるが故に今日あるを致せるなり。他面より觀れば彼れの生中事業計畫の頭腦を有せず突飛なる擴張策を講ずるが如き事なく漸次社運の發展を圖れること或は東洋汽船の如き蹉躓を見ざる所以ならずんば非ず、男近藤の守成無能も見様に依りては一概に非議す可からざるなり。

(六) 軍政部の主腦

政界及び實業界の人物を一瞥したる吾人は更に進んで陸海軍の諸星を點檢せんとす。軍政部には陸軍に陸相中將岡市之助あり之を繞りて次官中將大島健一軍務局長少將柴勝三郎等あり海軍に海相中將八代六郎あり。其の周圍に次官少將鈴木貫太郎軍務局長少將秋山眞之の俊髦あり海軍の顔觸の陸軍に比し其の人物異彩を放ち活氣横溢の趣あり。

海相八代は腦天既に禿し鼻下に漆黒の八字髯を蓄へ金縁の眼鏡を掛け白服を纏ひたる瀟洒たる風采は何となく金鯨城下の美少年の昔時を偲ばしむるものあり。然れども其の凜乎と引緊りたる口元其の唇端を迂り出づる所の語調は簡潔にして而も生氣あり。彼れが議會に於ける答辯の如きは勁烈にして皮肉あり爽亮明快にして一語能く聽者を魅するものあり。時に代議士を口舌に齷弄し殺活擒縱の妙趣を發揮する所宛然短劍を肺腑に擬するに似たり。されば船乗と侮りたるが故に却て傷を負はされたる代議士なきに非ず。陸相岡の卓上

に兩手を突き申譯するが如く演説を語るに比すれば霄壤の差あり。八代は名利に恬淡にして産を作らず。其の不動産の如き横濱在に墳墓の地一畝歩を有するに過ぎずと。將軍乃木にして猶赤坂の邸宅あり。那須野に開墾地を有せるに八代の赤裸々たる資性高潔なる古武士の風ありと稱するも過褒に非ず。彼れは居常質素にして禪家の如く枯淡の生活に安んじ其の金鵝勳章に對する年金は日露戰役當時の部下の遺族に頒ちて一毫も私腹に投せざるは愛錢將軍乃至收賄提督の尠からざる今日何等深刻なる諷刺ぞや。彼れは一介の武弁に非ずして學者の風骨あり。夙に露西亞の民性を研究し、『露西亞史の翻譯あり。其の譯文の暢達せる其の用意の細心周到なる當時の翻譯業者を愧死せしむるものあり。彼れの趣味は單に一管の尺八のみに非ず露文の翻譯に日蓮の研究等にも存するなり。趣味の人動もすれば

自家の好惡に左右され感情の冷熱なきに非ずと雖も生命に潤澤あるは争ふべからず。八代の短所又茲にあるも一たび感激すれば粉骨碎身せずんば止まざるの美點あり。軍政治家としては多少の疑問なきに非ざるも海軍の積弊を一掃し人材を要樞に擧用し配置するに銳意するの一事は賞せざるを得ず。

次官鈴木は明治二十年の兵學校出身にして局長秋山に先んずること三年なり。温順謹厚なるも事に臨んで勇斷果決剛直の本質を發揮す。日清戰役當時大尉を以て第六號水雷艇長となり威海衛東口の防材を破壊して殊勳を樹てたるが如き日露戰役の際中佐を以て第四驅逐隊司令となり朝霧に坐乗して敵艦を寒からしめたるが如き之を證して餘あり。四十年大佐に進み水雷學校長筑波艦長舞鶴水雷隊司令等に歴任し遂に人事局長となり海相八代の下に次官となれり。彼れ

は水雷戦術家の雄なるも軍政に干與せんには多少偏する所あり必ずしも次官適任者とは稱すべからざるも公正廉直なる點に於ては海相八代と同氣相引くものあり。薩派を制肘せんには適材なるやも知れず。少將秋山は日露戦役當時中佐を以て第一艦隊の先任參謀たり。戦後大學校教官艦長艦隊參謀長軍令部參謀等となり多く參謀の要職にありしも昨春海相の更迭と同時に軍務局長に就任せるなり。彼れは乃木の如き徳望なきも機鋒勁烈にして快刀亂麻を斷つ底の手腕あり。其圭角動もすれば他と接觸して火花を散す事なきに非ざるも愛媛の才氣と鋭敏とは總ての上に働きつゝあるを見る。其の文章も亦其の人物の如く適勁日本海々戦の報告文に『艦々相摩』の警句を新造し世人を驚嘆せしめたるは周知の事なり。彼れ既に此の才智あり氣略あり而して事務的手腕あるを以て進めて次官となすも亦不可ならざるを覺ゆ。

らざるを覺ゆ。

陸相岡は鬪將に非ずして黒幕の人なり。山縣系落莫の今日岡の如きも亦系中有用の材なり。次官時代に増師問題を捻出し來りて時の内閣を瓦解せしめ大正劈頭の政變の因をなせるは世人の記憶に新なる所なり。後第三師團長に轉じて暫く雌伏せるが現内閣の成立と共に再び陸軍省に舞戻りて一躍陸相の椅子を占めたり。清浦流産内閣にも陸相に擬せられ而して現内閣に就任せるを見れば現下山縣系中に於て彼れを措いて適材なきを知るべきなり。岡は一見愛嬌者の如く赭顔に冷かなる微笑を湛ふる時何人も其陰險にして辛辣なる手腕を有するを知らざれども一たび黒幕に没し去るの時眼光猫の如き爛爛々たるものある公山縣の彼れを寵愛するは即ち此種の黒幕の手腕を有する從順の策士なるが故なり。其畫策周密にして一事を苟

もせず豪放田中義一の突貫式なるとは其の趣を異にする。次官大島は公山縣の秘書官となり其の懐に喰ひ下りて以來荐りに陞進して參謀次長となり今次岡の女房役として軍政部に轉じたり。彼れは談論風發の人事務的手腕も亦凡ならず策士の岡の補佐役としては蓋し其人を得たりとすべきか。然れども器局大ならず斷じて次官以上の器に非ざるなり。少將柴は閣外の人物を以て目され前内閣に登用されたるも今尙依然として其の職に在り。彼れは水戸人の押強き所あり自己の所信を貫くに確固たる意志を以てする故に時に他と衝突する事なきに非ず。好個の參謀官なるも軍政治家としては未知數なり。次官大島の既に行き詰りたるの觀あるに比すれば彼れの將來は洋々たる春の海の如きものあり。偏せず黨せず毅然として操守を變へざるに於ては一時逆境に立つことあるも遂に群を抜くに至るや必せり。

(七) 軍令部之樞軸

陸軍省に於て長閑の蘇生せるが如く參謀本部に於ても亦其の色彩の顯著なるを致せり。吾人は世界的戦争を試みつゝあるの今日長閑乃至薩派等の語を用ゐるを好まずと雖も其の事實の現存するを如何ともすべからず。見よ、總長に男長谷川好道あり、次長に明石元治郎あり、二人共に伯寺内の下に朝鮮の警察權を握り憲兵司令官たりし人なり。男長谷川は既に大將に進み參謀本部内に隱然たる勢力あり。先年岡田中の徒と謀て増師問題に天下を騒がせ薩の海軍の向を張りて、長の陸軍の爲めに氣を吐きたるなり。明石は常に一種の陰謀家の如く見做され山本内閣の破壊運動を試み若くは支那浪人を使喚せるも彼れなりと政友會視目の焦點となれる事なり。彼れは男長谷川の武

斷一片の士に非ず、野心あり、霸氣あり、活氣ある所の策士なり。日露戰役當時波蘭に入りて、虚無黨を利用し、以て露國の活動を牽制せるが如き、變通自在の策を弄するの膽略あり。參謀次長の適任者なりや否やを知らずと雖も、戰時に於ける或種の行動には、須要の材たり。知らず彼れは、今次の戰亂に際して、如何の妙算奇計を以て、武斷外交の効果を收めんとする乎。

海軍軍令部は、此程改革せるを以て、新銳の氣自ら溢るゝものあり。部長に大將島村速雄あり、次長に少將山下源太郎あり。島村は明治七年兵學校に入り、大將加藤友三郎と同期生なり。理智明晰、英邁果敢の駿足なるに、搗て、加へて伯山本の股肱となれるを以て、其の陸進速かなること、儕輩をして目を時てしめたり。日清戰役には、少佐心得を以て、聯合艦隊の參謀となり、日露戰役には、大佐を以て、伯東郷の參謀長と

なり、善謀善戰名聲藉甚たるものあり。次で少將に進みて、艦隊司令官となれるは、蓋し異數の拔擢なり。後數年中將となり、佐世保鎮守府長官に補せられ、殆んど絶頂に達せるの觀ありしが、大將伊集院五郎の轉任を餘儀なくさるゝに至りて、人も我も望める所の軍令部長の要職に座するを得たり。彼れ近年豪酒の爲めに、頭腦を害し、雋敏の資に禍する所尠しと稱されたるも、未だ必しも然らず、健康例の如くにして、軍務に鞅掌しつゝあり。少將山下は、山形の人、戦術上の新智識を以て鳴る。器局稍少將上泉德彌に劣るも、海軍部内に於ける新進の雄なり。中將佐藤鐵太郎と共に、山形出身三雄の稱ある、又故なきに非ず。更に翻つて、作戰部面を見るに、第一艦隊司令長官加藤友三郎、司令官に中將山屋他人あり。第二艦隊司令長官に中將加藤定吉、司令官に中將柄内曾次郎あり。第三艦隊司令官に少將土屋光金あり。加藤友

三郎は日本海々戦に殊勳を樹て、島村と並びて盛名を海戦史上に馳せたり。人物伶俐なるも、傲慢にして、人を観ること皮肉なり。今春清浦内閣の海相に推され、就任するかに見えしが、伯山本乃至男齋藤等の先輩に氣兼ねして、逡巡決する能はず、遂に將來の幸福上より打算し、短命なるべき内閣の海相たる事は御免を蒙りたるを以て、流産の已むなきに至れり。彼れは身を處すること斯の如く巧みなるも、部下を信服せしむる點に至りては、島村及び加藤定吉に數歩を譲らざるを得ず。

加藤定吉は、侯西郷に愛せられて海相秘書官となり。伯伊東に拔擢せられて軍令部長副官となり、佐官時代には海軍省及び軍令部に勤務せしを以て、軍政の經驗淺からず、人と爲り豪放にして義氣あり。少事に拘々焉たらす、而も包擁力の大なるを以て、其の周圍に新進の英物の粘著するを觀る。速雄、友三郎の徒、或は海相として非難なきにあらざ

るも、彼れは必ず將來海相の器たるを疑はず。山屋は明治十九年兵學校を出で、三十年海軍大學を卒業し、中佐となるに及びて母校の戦術教官たり。日露戦役の際、千歳艦長と旅順口の海戦に参加し、戦後軍令部の參謀となり、少將に陞進するや、教育本部第一部長となり。次で海軍省人事局長となり。昨年大學校長に任せられたり。人物沈勇にして、理智に長じ、艦船操縦の自由なること五指を動かすが如く、海軍戦術家として當代に傑出せり。彼れをして艦隊司令官たらしめたるは、洵に適材を適所に置くものなり。

(八) 攻城野戦の雄

陸軍の將星、其の數尠からずと雖も、現下視目の焦點となれる、中將神尾光臣、少將堀内文治郎等ならずんば非ず。神尾は明治十三年少尉時

代より日清戦争の起るべきを豫言し、一旦緩急ある際の準備に、支那語を學び支那の國情を研究せり。數年ならずして支那語に熟達し、自由に會話を試みるに至り、擢んでられて清國公使館附を命せられ、前後四年間北京に在留せり。然るに不幸にも彼の豫言的中し、日清兩國の開戦を見るに至りしが、公大山の率ゐる第二軍の參謀となりて、金州方面に轉戦し、拔群の功を樹てたり。日露戦役には又旅團長として乃木軍に參加し、旅順戦後馬首を回して奉天に向ひ、猛勇無比の血戦をなせり。彼れ人と爲り重厚にして篤實、作戦の畫策に長ずるのみならず、實戦に於ても亦勇敢なる將軍なり。殊に支那語を解し、其の國情に精通するを以て、大陸方面に活動するには、好個の作戰家たるを失はず。

少將堀内は、信州産の奇骨漢なり。一見鬼をも挫く面魂なるも、英雄閑日月ありて、和歌及び繪畫の趣味を解す。近時彼れ將に成す所あり。

らんとし、一首を詠じて知己に寄す。曰く、「佩く太刀をまた拭はんと窓近く出づれば涼し蟬時雨して」と、懷藻掬すべきものあり。彼れの軍隊にあるや、謹嚴身を持ち、苟も怠る者あれば、聯隊長と雖も之を卒伍の面前に於て叱責す。是を以て彼れの粗暴を非難し、或は彼れを敵視する者なきに非ずと雖も、内心邪氣なく善く部下を愛撫す。兵士の器械體操を視察するや、彼れ自ら鐵棒にぶら下りて其の要領を教授す。故に兵士等彼れを稱して分隊長となす。旅團長にして此の綽名を得たるもの、恐らく少將堀内を以て嚆矢とすべし。奇骨漢必しも奇功を樹つべしとは信せざれども、勇敢彼れが如くにして光風霽月の概あるもの、争でか奇功を奏せずして已む可けんや。

最後に記せざるべからざるは、我が航空界の活動なり、飛行船、飛行機及び飛行將校の數よりする時は、敢て歐米に對して誇るに足らずと雖

も其の勇猛沈著なる攻撃振に至りては、毫も毛唐に比して遜色あるを見ず。民間飛行家は暫らく措き、陸軍の代表者に工兵大尉徳川好敏あり。海軍の夫れに少佐金子徳三あり。孰れも飛行將校を教育して、陸海に其の雄姿を競ひつゝあり。

大尉徳川は伯徳川篤守の嫡子なり。篤守は往年海外に學びて令聞あり、華胄界に頭角を擡げんとせしが、家臣に誤られて家産を蕩盡せしさへあるに、汚名を蒙りて禮遇停止を命せられぬ。彼は此の落魄の裡に人と爲り、奮發家名を恢復せんとし、身を軍籍に投じたるなり。徳川の心掛既に斯の如くなるを以て、言行一致、只管飛行界の發達に肝膽を砕きつゝあり。彼れは日露戰役の際、少尉を以て出征し、凱旋後士官學校教官となりて、清國留學生を薰陶し、次で砲兵學校高等科に學びて、技能優秀を以て稱されたり。數年前飛行機購入の際、佛國に派遣され、

アルマン飛行學校に學びて卒業免狀を獲得し、歸朝後所澤に於て飛行を試みしが、是れ本邦に於ける飛行の最初なりき。爾後飛行機の研究を積み、徳川式を新調すると共に、飛行技術も漸く妙境に入り、長途飛行に成功するに至れり。徳川の飛行振は、其の性格の濃厚沈著なるが如く、整然として亂れず、何等の奇を弄せざる所に、其の特色を見る。夫の血氣に逸りて宙返りの曲乗を演ずるが如きは、彼の好まざる所なり。少佐金子は廣島の人、明治三十五年兵學校を出で、日露戰役當時は舞鶴海兵團附となり、累進して四十九年大尉に任じ、翌年砲術學校選科に入り、四十二年吳海兵團の分隊長となれり。始めて飛行界に身を投じたるは、四十三年海軍大學選科に入りて飛行機を研究せるに起因し、十四年三月佛國に赴きて飛行術を研究し、同年六月佛國飛行俱樂部より飛行免狀を獲得せり、其の練習せるは、モ式水上飛行機なるが、歸朝後

横須賀に新設せる海軍航空術研究委員に擧げられ、昨年十一月海軍大觀艦式舉行の際、其の處女飛行を天覽に供せり。資性剛毅、沈黙寡言にして、老成人の風あり。常に追濱飛行場に其の技を練り、且飛行將校の教育に従事せしも、陸軍の如く嘖々たる好評なく、或は一籌を輸するに非ざるやの懸念なきに非ざりしが、果然今回の青島攻撃に於て其の秀拔なる技倆を現はせり。而して其の飛行の任に當れるは、彼れ及び大尉和田秀穂、中尉武部鷹雄等にして、彼れは實に其の大立物なり。

飛行機を如何に實戦に使用せんかは、軍事界の宿題たりき。敵情偵察の如き、飛行撮影の如き、爆彈投下の如き、常に練習せられたりと雖も、敵の砲火を浴びつゝ、幾許程度まで其の目的を達すべきか、敵情偵察爆彈投下以外に如何なる効果を齎すべきか。是等の實際に就ては之を驗すること能はざりしか、端なくも今次の青島攻撃は、最も確實に實験

し最も有功に使用するの機會を與へたり。今日まで假想敵に向つて使用されたる飛行機の實戦に會して多大の教訓を得、研究以上の研究となりて、新に發見する所甚大なるものあらん。吾人は過世の人が夢想せる空中戦争の、現下實際に行はれつゝあるを見て、深き感激に打たれずんば非ざる也。

政友會の領袖大岡育造、陣笠松田源治の徒が、帝國議會に於て非戰論者的口吻を洩す間にも、交戰的行動は間斷なく續行され、飛行界の快報吾人の卓上に落下し來る。夫の政友會の不徹底的言論の如きは、徒らに國民の情氣と倦怠を催すの外、何等得る所あるものに非ず。現内閣の臨時軍事費要求の形式に誤あらば、斷々乎として之を修正すべく、何の遠慮を要せざるなり。政友會の絶對多數たる以上、修正せんと欲

すれば之を修正し得べく否決せんと欲すれば即ち否決し得べきなり。而も解散を恐るゝこと薄氷を踏むの思ひある彼等は市井の徒が仲裁を見越して啖呵を切るが如く、徒に文句を附け毒づきあふに止まる。斯の如きは決して積極的舉國一致に非ず又大政黨の採るべき態度に非ざるなり。苟も現内閣の舉措を非とする以上毅然として反對を試み己れの所信に殉すべきなり。此の間戦争に熱せる世人の感情的攻撃を顧慮するを要せざるなり。然るに。彼等の反對の氣勢を揚げたるは政争上の懸引に過ぎざるを以て首相大隈等の強硬なる態度を持するや遠吠的惡口を以て之に對するのみにて男らしき舉措に出でず少數の前に屈伏するの已むなきに至れるこそ笑止なれ。斯の如くれば始めより啖呵を切るの要なく肅然として賛成の意を表すべかりしなり。(鐵拳禪)

(をばり)

大正八年十月二十五日印刷
大正八年十一月十日發行

化の皮

著者 山野芋助

定價 金壹圓參拾錢

有所權著作

發行者 瀧川長之助
東京市神田區佐久間町四丁目六番地

印刷者 菅井十一郎
東京市神田區松住町五番地

印刷所 碓文舎
東京市神田區松住町五番地

發行所

長正堂書店

東京市神田區佐久間町四丁目六番地

117
1105

終

